

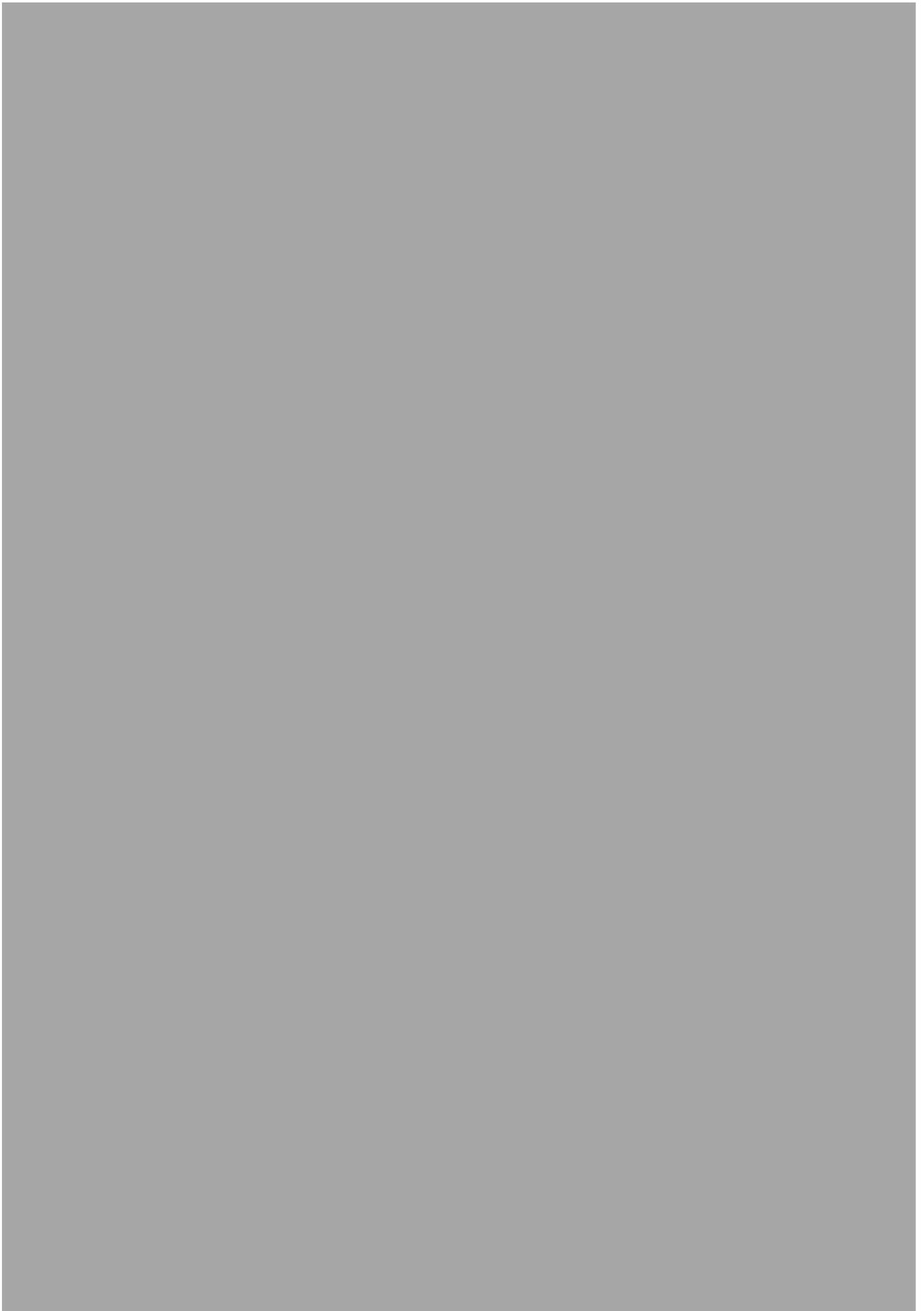
令和7年度 推薦に基づく入学者選抜

小論文

注意事項

- 1 問題は **1** から **2** までで、7ページにわたって印刷してあります。
1 と **2** の両方に答えなさい。
- 2 検査時間は**60分**で、終わりは**午後1時00分**です。
- 3 声を出して読んではいけません。
- 4 解答用紙は3ページと4ページの間にはさまれています。
- 5 答えは全て解答用紙に明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい**。
- 6 答えは解答欄におさまる長さにまとめ、解答欄からはみださないようにしなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に記入しなさい。

東京都立国立高等学校



問題は次のページに続きます。

【1】次の【文章一】と【文章二】を読み、各問に答えなさい。なお、*付きの語句には【文章二】の後に〔注〕がある。

【文章一】

アフリカ人の生活の合理性

アフリカで、すぐには理解しにくいことに当面すると、外国人は「これがアフリカなのですよ」で片付けることが多い。つまりアフリカ人は後れていて、我々とは違った考え方をし、我々には分からない行動に出るといふアフリカ人異質論である。アフリカ人異質論は、日本人異質論と同じく、これを肯定すれば、何事も説明できる便利なものである。

しかし、同時に理性的な対話の可能性を否定し、問題解決には役に立たないものである。このような異質論は、アフリカを理解する努力を放棄するものであり、また、自分の考え方がつねに正しく、アフリカ人の考え方は後れているという思い上がりからきている。

ルワンダにはバナナ畑が一面に広がっている。農林省のベルギー人顧問は、ルワンダ人は、一番肥沃な土地に外貨を稼ぐコーヒーを植えないで、ビールにするバナナを植えていると嘆いていた。私も、ルワンダ人にバナナは何にするのかと聞いたが、ビールにするとのことであった。しかし、納得できないので、今度は、ルワンダ人の食事について聞いたら、一番好きなのは豆類、次は芋類、次にバナナだとのことであった。それでは、一家を構えるために畑を開墾して、一番先に植えるのは何かと聞いたら、バナナ、次には芋、最後に豆を植えるとのことだった。

なぜ嗜好の逆の順序に植えるのかと聞いたら、バナナは天候の変化や、病・虫・鳥害に強く、どんな土地でも成育し、短期間で成長し、つねに実が豊富になるからだ、芋は十分な大きさに成長するにはバナナよりは時間がかかるが、季節に関係なく、成育すれば一年中何時でも収穫でき、天候に影響されない。これに比べ豆は収穫までの時間が長く、収穫量も少なく、年二回の雨季に植え付けなければならないので、年に二回収穫され、しかも天候の変化や病・虫・鳥害に弱い。さらに、ルワンダの固い土には豆、その他の一般作物はうまく成育しないので、バナナの落ち葉を土に鋤き込んで土地を改良してから、植えることが必要であり、また、若芽の頃は強い日射には弱いので、バナナの葉陰で保護しなければならないからだとのことであった。

当時のルワンダ農民のほとんど全部は自活農であり、彼らにとっては家族の食料の安定確保が第一であることから考えれば、たとえ嗜好的には不味くても一年中天候に関係なく実るバナナをまず植え、次いで芋類を植え、それで十分な食料が確保されてから嗜好的に好ましい豆を植えるこの農作法はまことに合理的なものである。

作物は当然嗜好の順に消費されるから、最後はバナナが過剰となるのでビールにするのである。バナナや*稗ひえから作るビールのなかには、強い酒もあったが、一番大量に作られ、家庭飲料として消費されていたのはアルコール度の低い清涼飲料の味とする濁酒じゆけで、ルワンダ人の貴重な飲料である。

アフリカでは、川や池の水は寄生虫が多く、マラリヤ蚊や*河盲症（オンコセルカ）のブヨが繁殖しているので、人家は水辺を避けて建てられ、清浄な水は家の女子供が遠く泉まで汲みに行かなければならない。泉から運んできた飲料水は溜めたまま放置すれば悪くなるばかりでなく、ブヨ等が発生するので、飲料水の保存方法としてビールにするのである（この飲料水の保存方法は、南米のアンデス山中の村落でも行われている由である）。私は、ルワンダの農家でバナナの落ち葉を子供が土にすき込んで、土地の沃土化に努めているのを見て、ベルギー人農業顧問のいうように肥沃な土地にバナナを植えているのではなく、バナナを植えたから肥沃な土地となったのであることを知ったのである。

世界銀行で親しくなったドイツ人の農業技師にこの話をしたら、彼は以前農業指導員として勤務していたインドでの経験を話してくれた。農民が水田で米の苗を束にして植えているので、一本ずつ植えるよう何度も指導したのに、農民は相変わらず束にして植えていたので、インド農民は保守的で農法改善の意欲がないと諦めていた。しかし、その後、灌漑用の水の管理が改良されたら、農民は自発的に一本植えをするようになった。インドのモンスーン（雨季）の時期には、水の管理が悪いと、激しい雨水で一本植えの苗は流されてしまうので束植えをしていたのだ、その心配がなくなったので自発的に一本植えにしたのだということが初めて分かって、農民の知恵を過小評価していたことを反省させられたとのことであった。

このように、途上国の農民の生活の在り方には合理的なものが多く、援助をする場合、この合理性を理解し、これを活用する方策を探ることが何よりも肝要であると思われる。しかし、この合理性を発見することは偏見をなくし、アフリカ人の合理性を信じて、根気よく対話をしなければかなり困難なことである。そして、その他に種々の思い込みが生産的な対話の障害になっているのである。

【文章二】

過小生産―短い労働時間と使用価値の文化

アメリカの人類学者サーリンスは、狩猟採集や焼畑農耕を生業とする諸社会について書かれた多くの民族誌を検討し、これらの社会を「始原あふれる豊かさに満ちた社会 (original affluent society)」と表現した。これらの社会において、食料を得るための労働時間がきわめて短く、利用可能な資源や労働力が一部しか使われずにいることに注目したからである。狩猟採集社会では、一日平均二〜三時間の労働で、必要な食料を手に入れることができる。焼畑農耕民の社会でも、一日平均の労働時間は三〜四時間で、多様な食料が獲得できる。労働力として頼りにできる成人男女のうち、若年層がほとんど働いていないことも指摘された。

特定の地域に住む人口を指標にして、その地域で利用可能な資源量を推定すると、焼畑農業を営んでいる地域に現存する人口は、計算上の最大人口容量よりもずっと少ない傾向があるという。もともと高い人口密度をもつニューギニア高地のある民族集団でさえ、計算上の人口容量の六十％程度

でしかなかった。アフリカのコンゴの森林地帯でも、ガーナのココア生産地帯でも、実際の人口密度は土地の負荷能力をはるかに下回っているという。資源の利用という点から見ると、利用可能な資源を最大限には利用しないこと、労働という点から見ると、少ない人員による少しの労働によって、そのときの必要なだけの食料を入手するという点が、狩猟採集社会や焼畑農耕社会の生産様式の特徴であるとサーリンズは指摘し、これを過小生産と呼んだ。

これらの社会ではなぜ、使えるはずの資源を最大限に利用しないのだろうか。その基盤には、必要が生じたときに労働し、必要を満たすだけの資源を入手すると労働をやめてしまうという態度がある。*市川は、私たちの社会からは「非常識」とも見えるようなこの態度を育む文化社会的状況を、商品経済が支配的な社会の「交換価値の文化」と対照させて、「使用価値の文化」と呼ぶ。市川は、商品経済に取りこまれていない社会では、自然の多様な資源が生活上の必要や文化的な意味を満たしており、自然の多様な要素の安定利用と、社会と生活の持続性をもとめられるという。それに対して、経済的な動機が支配的な社会（商品経済に取りこまれた社会）では、商品価値をもつ少数の資源の集中的、効率的な利用が目的とされる。

使用価値の文化が重要な社会はまた、物を必要以上に多くもつことに価値を見いださず、それゆえに必要以上に生産することに意味を与えない社会である。それは、かれらの社会が移動性を基本にした小規模な社会であることと、次の節で述べるように、必要なものが社会の成員全体に行きわたるような分配の仕組みを備えた社会であることが深く関係している。

焼畑農耕社会における平準化機構

アフリカにおける焼畑農耕民の村落では、食物についての相互扶助関係が一般的で、経済的格差の拡大や階層分化を抑制するような仕組み（平準化機構）があることが報告されている。

タンザニアの西部、マハレに住む焼畑農耕民トングウエの社会でフィールドワークを行った*掛谷は、トングウエの人々が、自分の畑で取れた作物のうち、実に四割にも当たる食物を他の村の人々に「ごちそう」しているという驚くべき事実気づいた。人々は毎年、自分の世帯で食べるのに足りるだけの畑しか開墾しないから、収穫した作物の四割も他人に食べさせてしまっただけは、自分たちの食べる分がなくなるはずだ。でも、かれらは困らない。自分たちの食料が底をつくとき、トングウエの人々は親族や友人を訪問して、そこで「ごちそう」になるのだという。このように互いを訪問しあい、食物の提供を受け合うことによって、人々は年間を通じて安定した食料を確保しているわけだ。客人に気前よく食事をふるまい、自分の世帯の食物がなくなったら、自分たちが他の世帯の客人になるという広い社会的範囲に及ぶ互酬的（ごしゅう）な関係が、生計の基盤にある。

なぜトングウエの人々は自分の世帯で食べるのに足りるだけの畑しか作らないのだろうか。なぜ、自分たちが食べるはずの分まで、他の人に「ごちそ

うするのだろうか。掛谷は、トングウェの生計に、①最小努力の傾向性と②食料の平均化の傾向性という二つの基本的な特徴があることを指摘し、それがトングウェ社会の基本にあたる社会的規範と、「妬み」の制度化による平準化の仕組みに支えられていることを明らかにした。

トングウェ社会では、気前のよさが重要な社会的資質である。来客があれば、もっている食べ物を惜しみなくごちそうし、もてなすことが当たり前とされる。そこには、何かをもっている人は、他人に分け与えなければならないという社会的規範が深く関与している。客人が来たとき、気前よくもてなす人は、社会的に高い評価を得ることになるし、それによって客人との間に親和的な社会関係を築くことができる。その関係は、自分もまたない立場になったとき、他の人から確実に食べ物をもたらえることを保証する。互いに食べ物を分け与える行為が、相互の密接な社会関係を作りだし、その社会関係があることが、互いの間でのさらなる食べ物の分与を生み出すのである。このようにして、村を越えた広い範囲の人々の間で、相互に密接な社会関係を作りだされ、維持される。それは、自分の努力ではどうにもならない災害にみまわれたときにも、安定した援助を期待できる社会保障のネットワークになっているとも言える。

「分け与える」ことに関する社会的規範は、他方で、他の人からの「妬み」への恐れに支えられていると掛谷は述べ、それをアフリカの人類学者フオスターにならって「制度化された妬み」と呼んだ。アフリカ農耕民の社会には、他者の妬みが呪いのろとなつて発動し、分け与えなかった人に災厄をもたらすという考え方があつた。分け与えなかった人には、悪評と同時に、他者からの呪いによる災厄がめぐつてくると考えられているわけである。つまり、食物を中心とした分配の仕組みは、「分け与える」ことを望ましいとする社会的規範によって支えられていると同時に、それに反する行動を取る者には、他の人々の妬みを介した呪いがふりかかるという恐れによって裏支えされていると言える。それが、多くの物をもつ人から、もたない人への物の流れを促進し、結果的に、個々人の経済的格差を平準化する仕組み（平準化機構）を生みだしているという。

このように焼畑農耕民社会では、足りないときには他の人からの分与を受けられるが、必要以上にもつていけば、他の人に分け与えなければならぬという規範と、それを支える仕組みが重なりあつているので、人々は必要以上に畑を開墾して作物を作ろうとはしない。結果的に、過度の開墾が抑制され、利用可能な資源を最大限に利用することが抑制される。サーリンズが指摘したような「過小生産」の実態は、このような分配の仕組みが根底にある社会だつたことがわかる。そこから明らかになるのは、このような社会において、生産の上限を規定するのは、経済ではなく社会関係なのであり、経済（資源利用）は、具体的な社会関係とは切りはなすことのできない、社会的活動の一部だということである。この点が、経済が社会関係とは別に動いている西欧近代社会と大きく異なつているといえる。このような社会の豊かさは、ありあまる物を生産することによってではなく、生産されたものが社会の成員にあまねく行きわたることによって実現している。

〔注〕 *稗ひえ：雑穀の一種。

*河盲症かもうじょう：河川を繁殖場所とするハエが媒介ばいかいする感染症で、重症化すると失明することがある。

*市川：日本の研究者。

*掛谷：日本の研究者。

出典

【文章一】 服部正也「援助する国される国 アフリカが成長するために」

【文章二】 作道信介「近代化のフィールドワーク 断片化する世界で等身大に生きる」〔改訂〕

問一 【文章一】から読み取れる、ルワンダ人がバナナを優先的に植える理由を八十字以内で説明しなさい。

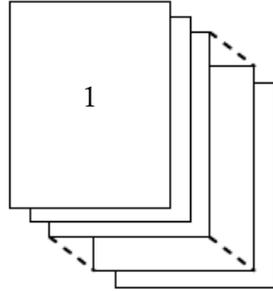
問二 【文章二】に、生産の上限を規定するのは、経済ではなく社会関係なのでありとあるが、これはどういうことか。九十字以内で説明しなさい。

問三 二つの文章で述べられているような、理解しがたいと思えることに直面した際、あなたはそれをどのように捉え、行動するか。二つの文章に共通する主旨を挙げた上で、あなたの考えを百五十字以内で述べなさい。

問題は次のページに続きます。

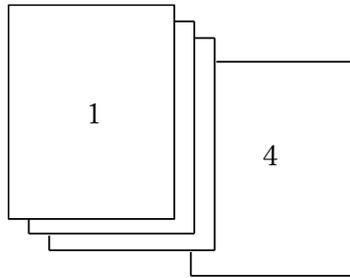
2 次の文章を読み、各問に答えなさい。

カードに1, 2, 3, …と順に番号をつけ、一番上が1になるように上から順に重ねている。一番上のカードを一番下に回し、次に一番上になったカードを捨てるという作業を繰り返すとき、最後に残るカードの番号を考える。



例えば次のようになる。

① カード4枚で作業を繰り返したとき、最後に残るカードの番号は、「1」である。



② カード5枚で作業を繰り返したとき、最後に残るカードの番号は、「3」である。

問1 カード18枚で作業を繰り返したとき、最後に残るカードの番号を答えなさい。ただし、答えのみでよい。

問2 カード300枚で作業を繰り返したとき、最後に残るカードの番号を答えなさい。また、解答を導く過程について説明しなさい。

